

# 調査結果の概要

## 第1節 都立高校概要

本節では、今回の調査対象となっている都立高校について、基本的なデータと歴史、政策（高校改革）を紹介する。

### 1 都立高校に関するデータ

図1-1 東京都の高校数(平成19年度)

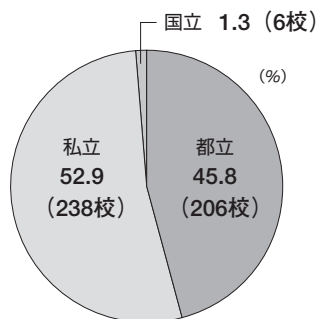
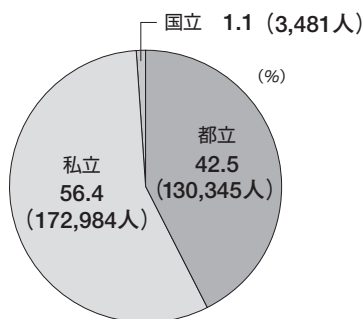


図1-2 東京都の高校の生徒数(平成19年度)



注) 図1-1、2ともに東京都総務局統計部「学校基本調査報告(平成19年度)」をもとに作成。

図1-1、2は、文部科学省が実施した平成19年度の学校基本調査のうち、東京都総務局統計部が東京都集計分のデータをまとめた「学校基本調査報告(平成19年度)」<sup>1</sup>の中で、東京都の高校数と生徒数に関して集計されたデータをグラフにしたものである。これを見ると、東京都では、都立高校よりも私立高校の学校数・生徒数のほうが多いことがわかる。学校基本調査では、私立高校の学校数や生徒数が公立高校を上回っている都道府県は東京都だけである。公立高校の立場について、東京都の特殊性がうかがえる。

### 2 都立高校の歴史

つづいて都立高校の歴史について、選抜制度・学区制に焦点をあててみていきたい。

戦後の教育改革の中で発足した新制都立高校に学区制がしかれたのは、1948年のことであった。これ以降、学区制のもとで入学試験が行われた都立高校だが、1950年代以降、都立高校間の学校格差が「問題視」されるようになった。学区内の特定の「有名校」への希望者の集中、各学校の入学成績の格差が次第に顕在化してきたのである(小島1974)。このような学校間格差を是正するために1967年に導入された制度が、学校群制度である。この制度では、生徒は高校受験の際、志望校ではなく学区の高校を2～4校に分けた学校群に出願し、各校に成績順に振り分けられた。この改革の結果、これまで都立高校へ進学していた層が私立高校へ進学する流れが生まれた、といわれている。

1982年には、学区内の高校を2つのグルー

ブに分け、グループ合同選抜制へと移行、1994年には単独選抜制に移行した。2003年には学区が撤廃され、都内のすべての地域の学校を受験できることとなった。そして現在、多様な特色をもった都立高校づくりが推進されるに至っている。

### ③ 都立高校改革について

昨今、都立高校では様々な改革が実施されている。ここでは特に、都立高校の多様化政策について重点的に説明していきたい。

#### 3.1 都立高校改革とは

1990年代後半から少子化による生徒数の減少などを背景にして、東京都教育委員会は都立高校改革の推進計画を何度かにわたって策定してきた。そして、2004年10月には「都立高校改革推進の集大成」として「新たな実施計画」を決定した。本節で紹介する内容は、「新たな実施計画」について詳しく説明されている『都立高校 新しい時代の幕開け——都立高校改革ガイドブック』（以下、『ガイドブック』と略）を参照している。

『ガイドブック』では、都立高校改革で目指すべき方向性について、「日本の未来を担う人間の育成」「生徒の多様な希望に応える学校づくり」「都民に信頼される学校経営の確立」「地域とパートナーシップを築く学校づくり」「少子化時代の質の高い教育の場の確保」という5つの点にまとめている。ここでは、「生徒の多様な希望に応える学校づくり」の例として「魅力ある学校づくり」と題された政策について説明したい。

#### 3.2 「魅力ある学校づくり」

『ガイドブック』によると、これまでは普通科高校といってもどのような特色をもった学校がどこにあるのかが明確ではなかったが、「新たな実施計画」を通してそれぞれの都立高校がもつ特色を明らかにした、と説明されている。では、具体的にどのようなタイ

プの学校があるのだろうか。今回の調査対象校である都立高校全日制普通科に焦点を絞ってみたい。

#### 3.2.1 進学指導重点校

進学指導重点校とは、都立高校の中でも「大学進学指導に関して熱心に取り組んでいる学校」である。2001年度に「日比谷・戸山・西・八王子東」の4校が、2003年度にはそれまで進学指導重点準備校として位置づけられていた「青山・立川・国立」の3校が、進学指導重点校として指定されている。

『ガイドブック』では、7時限授業・始業前や放課後の補講といったような大学進学を意識した教育課程が組まれていること、少人数授業や習熟度別授業の実施、土曜日や長期休業中の進路希望に合わせた講習の実施、卒業生の体験談や大学生の出前授業といった生徒個人の進路に合わせたガイダンスの実施、などを主な特色としてあげている。実際、難関大学に多数の合格者を出しているとの報告書が出されている。

#### 3.2.2 エンカレッジスクール

エンカレッジスクールとは、「基礎・基本の学習を重視した学校」である。2003年度に「足立東高校・秋留台高校」の2校がエンカレッジスクールとしてスタートし、2005年度に練馬工業高校が、2007年度に蒲田高校が追加された。午前中の国語・数学・英語などを中心とした30分授業の実施、体験学習や選択授業を中心とした午後の授業、少人数授業、2人担任制などが主な特色としてあげられている。エンカレッジスクールの効果として中途退学者の減少などがみられるようである。

#### 3.2.3 重点支援校

重点支援校とは、「進学指導、就職指導、生活指導、部活動など」の取り組みを特に積

1 この報告書の数値は、文部科学省の「平成19年度学校基本調査」の数値と異なる場合がある。

極的に行っている都立高校で、都が重点的な支援を行っている学校のことである。東京都教育委員会は重点支援校について、「学校の計画に基づき、人的支援、予算等の重点的な支援を3年間受け、さらなる改善を図る。また、年15校程度の重点支援校を選定していくことにより、都立高校全体の自律的改革の取り組みを促進していく」という説明をしている。

今回説明した普通科高校以外にも、中高一貫教育校、総合学科高校、チャレンジスクールなどがある。また、本報告書でも触れられている「ボランティア活動」「キャリア教育」など、このほかにも都立高校改革では数多くの政策が実施されている。都立高校と一口に言っても、その内実には様々なタイプの高校が含まれ、多様な教育がなされているのである。

#### <引用文献>

小島昌夫、1974、「学校群制度はどう変革されるか——都立高校入学者選抜制度の改善について」『教育』国土社、24(7): 15-27.

東京都教育委員会、2003、『都立高校 新しい時代の幕開け——都立高校改革ガイドブック』  
([http://www.kyoiku.metro.tokyo.jp/pickup/p\\_gakko/gide.htm](http://www.kyoiku.metro.tokyo.jp/pickup/p_gakko/gide.htm), 2008.8.20)。

東京都総務局統計部、2007、「学校基本調査報告(平成19年度)」  
(<http://www.toukei.metro.tokyo.jp/gakkou/2007/gk07qg10000.htm>, 2008.8.20)。

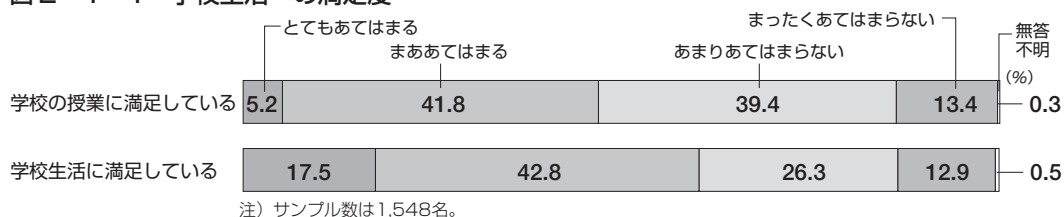
## 第2節 学校生活について

## 2.1 学校生活

6割の生徒が学校生活に満足している

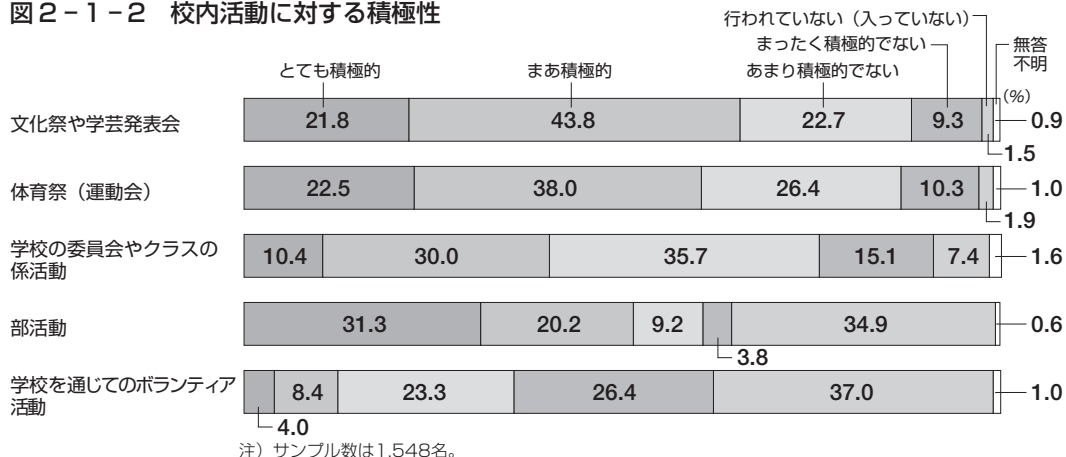
Q あなたには、次のことがどれくらいあてはまりますか。

図2-1-1 学校生活への満足度



Q あなたは、次のような活動にどれくらい積極的に参加していますか。

図2-1-2 校内活動に対する積極性



最初に、都立高校生が、授業と学校生活にどの程度満足しているかをみてみよう。図2-1-1について、まず「学校の授業に満足している」という項目については5.2%が「とてもあてはまる」、41.8%が「まああてはまる」と回答している。また、「学校生活に満足している」という項目については17.5%が「とてもあてはまる」、42.8%が「まああてはまる」と回答している。2つの項目を比較すると、都立高校生は授業に満足している比率よりも、学校生活全体に満足している比率が高いということがわかる。

また、図2-1-2は、学校内の様々な生活についての積極性をたずねた結果である。「とても積極的」と「まあ積極的」の合計比率をみると、「文化祭や学芸発表会」65.6%、「体育祭(運動会)」60.5%、「学校の委員会やクラスの係活動」40.4%、「部活動」51.5%、「学校を通じたボランティア活動」12.4%となっている。「部活動」では「入っていない」と回答している比率が34.9%と多い。その点を考慮すると、部活動に入っている都立高校生のほとんどが、積極的に取り組んでいることがわかる。

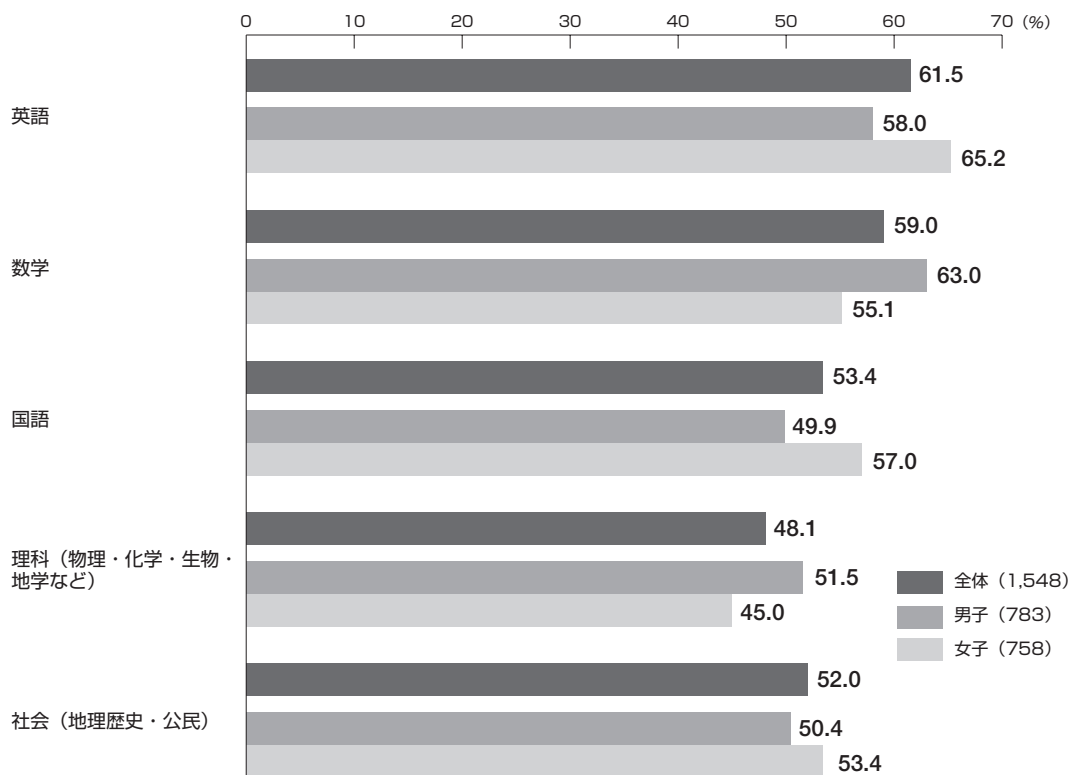
## 2.2

### 授業の様子

授業に熱心に取り組む生徒がもっとも多い教科は英語

Q あなたは、次の教科の授業に熱心に取り組んでいますか。

図2-2-1 各教科の授業への取り組み（全体、性別）



注1) 数値は「とても熱心」と「まあ熱心」の合計。

注2) ( )内はサンプル数。

都立高校生の授業への取り組みはどうなっているだろうか。図2-2-1において、「とても熱心」と「まあ熱心」の合計比率をみると、全体では「英語」でもっとも高く61.5%、「理科（物理・化学・生物・地学など）」でもっとも低く48.1%であった。図表は省略するが、2006年度に実施した私立中高一貫校の生徒への調査（以下、「私立高校生調査」とする。詳細はp.7参照）においても同様に「英語」で最高、「理科」で最低となっており、

高校生の各教科への取り組みには一定の傾向があることが示唆されている。

次に、性別の違いはどうだろうか。引き続き図2-2-1をみると、「英語」（女子65.2%>男子58.0%、7.2ポイント差、以下同）と「国語」（57.0%>49.9%、7.1ポイント差）では女子のほうが熱心であり、「数学」（男子63.0%>女子55.1%、7.9ポイント差）では男子のほうが熱心である。これについても「私立高校生調査」と同様の傾向がみられる。

## 2.3

## 学校選択理由

通いやすさ、学費を重視して高校を選択している

**Q** あなたの高校受験についてお聞きします。  
あなたが、現在通っている高校に入学しようと思ったのはなぜですか。

表 2-3-1 入学理由（全体、高校グループ別）

	全体 (1,548)	Aグループ (606)	Bグループ (308)	Cグループ (634)	(%)
自宅から通いやすいから	69.7	77.0	72.4	61.2	≫
学費が高くないから	66.9	82.0	62.6	54.6	>
学校の校風やイメージが気に入ったから	58.9	68.5	55.8	51.3	≫
部活動を楽しみたかったから	51.5	59.7	49.7	44.7	>
カリキュラムや勉強する環境が気に入ったから	50.9	67.3	38.3	41.3	≫
保護者にすすめられたから	42.3	53.2	39.9	33.1	>
大学進学の実績がよいから	41.2	72.9	24.4	19.0	≫
塾や予備校の先生にすすめられたから	25.8	32.4	28.2	18.4	>
友だちが行くから	23.0	13.4	26.0	30.8	≪

注1) 数値は「とてもあてはまる」と「まああてはまる」の合計。

注2) ≪≫は10ポイント以上、&lt;&gt;は5ポイント以上差があることを示す。

注3) ( ) 内はサンプル数。

都立高校生はどのような理由で、現在通っている学校を選択したのだろうか。表 2-3-1 で「とてもあてはまる」と「まああてはまる」の合計比率をみると、全体では、「自宅から通いやすいから」(69.7%)、「学費が高くないから」(66.9%) が特に高く、都立高校生が学校選択の際に重視する要因だということがわかる。また高校グループ別にみる

と、多くの項目においてAグループでもっとも値が大きくなっている。特にB・Cグループとの差が大きいのは、「大学進学の実績がよいから」「カリキュラムや勉強する環境が気に入ったから」である。「友だちが行くから」は唯一、Cグループでもっとも比率が高くなっている。

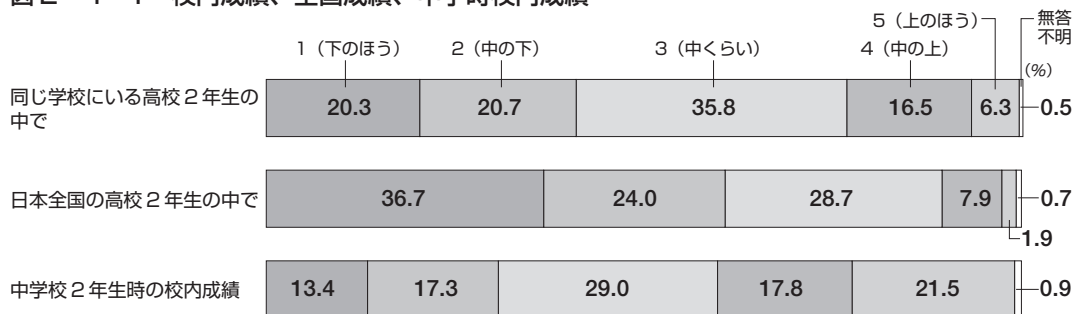
## 2.4

## 成績

全国における自分の成績の位置づけは低い傾向にある

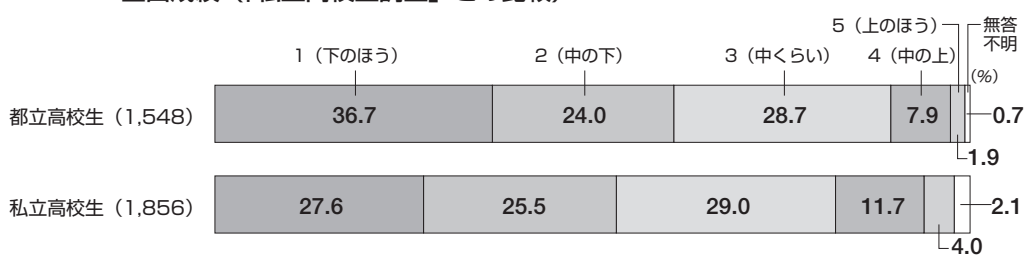
- Q** ●あなたの成績は、どれくらいだと思いますか。  
●中学校2年生のときのあなたの成績は、校内でどれくらいでしたか。

図2-4-1 校内成績、全国成績、中学時校内成績



注) サンプル数は1,548名。

図2-4-2 全国成績（「私立高校生調査」との比較）



注1) 「私立高校生調査」についてはp.7参照。

注2) ( )内はサンプル数。

都立高校生は自分の成績をどのように認識しているのだろうか。図2-4-1をみると、まず中学校2年生時の校内成績は「3（中くらい）」と答えた生徒が29.0%ともっとも多く、つづいて「5（上のほう）」と答えた生徒が21.5%であり、中学時代の自分の成績を高く認識していることがうかがえる。しかし、現在「同じ学校にいる高校2年生の中で」の成績に関しては「1（下のほう）」と「2（中の下）」をあわせると41.0%なのに対し、「4（中の上）」と「上のほう」をあわせると22.8%で、やや低く認識している。また、「日本全国の高校2年生の中で」の自分の成績は

「下のほう」と「中の下」をあわせると60.7%、「中の上」と「上のほう」をあわせると9.8%で、校内成績の位置よりもさらに低く見積もっている。

全国における自分の成績に関しては、私立中高一貫校の生徒（「私立高校生」）と都立高校生を比較すると図2-4-2のような差がみられた。自分の成績が全国では「下のほう」と答えた生徒は、都立高校生のほうが私立高校生より9.1ポイント高かった。全体的に私立中高一貫校の生徒に比べて都立高校生のほうが、全国における自分の成績の位置づけが低い傾向にあることがわかる。

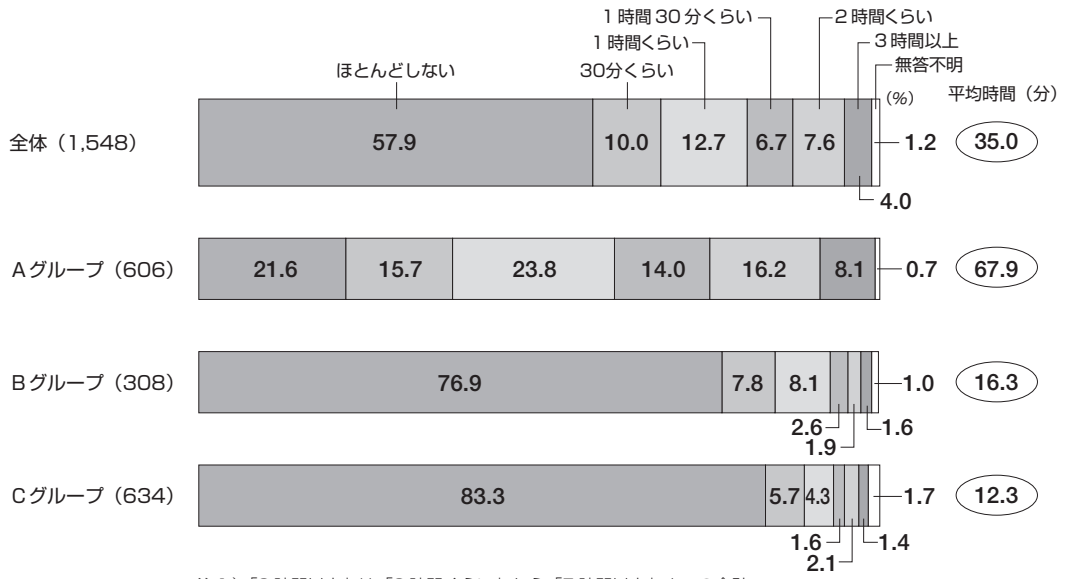
### 第3節 学校外での生活について

#### 3.1 平日の家での学習時間

Aグループの平均家庭学習時間は67.9分。B・Cグループは「ほとんどしない」生徒が8割前後と多い

**Q** あなたは、学校や塾・予備校での授業、家庭教師との学習以外で、平均して1日に何時間くらい勉強していますか。

図3-1-1 平日の家での学習時間（全体、高校グループ別）



注1) 「3時間以上」は「3時間くらい」から「5時間以上」までの合計。

注2) 平均時間は「ほとんどしない」を0分、「5時間以上」を300分のように置き換えて、無答不明を除いて算出した。

注3) ( ) 内はサンプル数。

都立高校生は学校からの帰宅後、どのような過ごし方をしているのだろうか。まず図3-1-1で家での学習時間をみると、全体では「ほとんどしない」が57.9%、「30分くらい」が10.0%であった。さらに高校グループ別にみても、「ほとんどしない」と答えた生徒の比率は、Aグループ21.6%<Bグループ76.9%<Cグループ83.3%となっている。

大学進学率が低い高校グループほど平日に勉強しない生徒の比率が高く、さらにAグループとB・Cグループの差は50ポイント以上と大きく開いている。平均時間をみると、Aグループは67.9分となっているが、B・Cグループは「ほとんどしない」が多いことが影響し、10分台と非常に短くなっている。



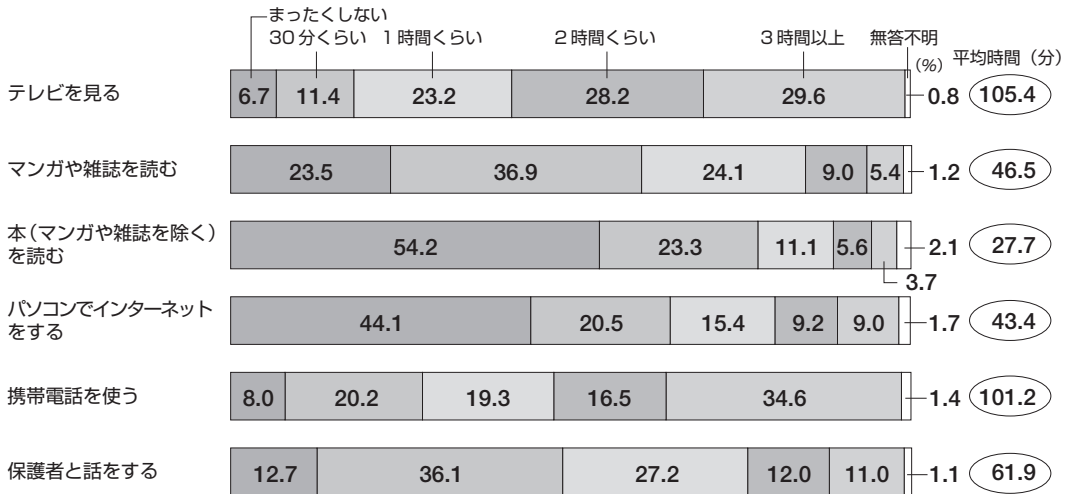
## 3.2

### 平日の家での過ごし方

「テレビを見る」「携帯電話を使う」に長時間を費やしている

Q あなたは平日に、次のことをどれくらいしますか。

図 3-2-1 平日の家での過ごし方



注) サンプル数は1,548名。

表 3-2-1 平日の家での過ごし方 (平均時間、高校グループ別)

	テレビを見る	マンガや雑誌を読む	本(マンガや雑誌を除く)を読む	パソコンでインターネットをする	携帯電話を使う	保護者と話をする
Aグループ (606)	91.8	37.6	24.7	44.0	74.2	53.3
高校グループ Bグループ (308)	106.9	50.6	30.3	44.8	110.7	67.1
Cグループ (634)	117.6	53.1	29.4	42.1	122.7	67.8

注1) 平均時間は「まったくしない」を0分、「3時間以上」を180分のように置き換えて、無答不明を除いて算出した。

注2) ( ) 内はサンプル数。

つづいて、平日の勉強以外の過ごし方についてまとめた図3-2-1をみてみよう。「3時間以上」と答えた生徒が多かったのは、「テレビを見る」(29.6%)と「携帯電話を使う」(34.6%)であった。一方で、読書時間は少なく、「本(マンガや雑誌を除く)を読む」では「まったくしない」が54.2%、「30分くらい」が23.3%であった。「パソコンでインターネットをする」についても、「まったくしない」44.1%、「30分くらい」20.5%と、それぞれ高い値を示した。「保護者と話をする」について平均時間をみると、テレビ視聴や携

帯電話使用ほどではないが、読書やパソコンでのインターネット使用よりも長い時間が割かれている。

表3-2-1で高校グループごとの平均時間をみると、「携帯電話を使う」で、特にAグループとB・Cグループの間に大きな差が生じている。ほかにも「テレビを見る」など、B・Cグループのほうが長く時間を費やしている項目があり、3.1の平日学習時間(p.15)とあわせると、放課後の時間の使い方が異なっている様子がうかがえる。

## 3.3

## 友だちづきあい

学校内の友人数や小・中学校からの友人数が多い

Q あなたには、親しい友だちがどれくらいいますか。

図 3-3-1 学校内友人数

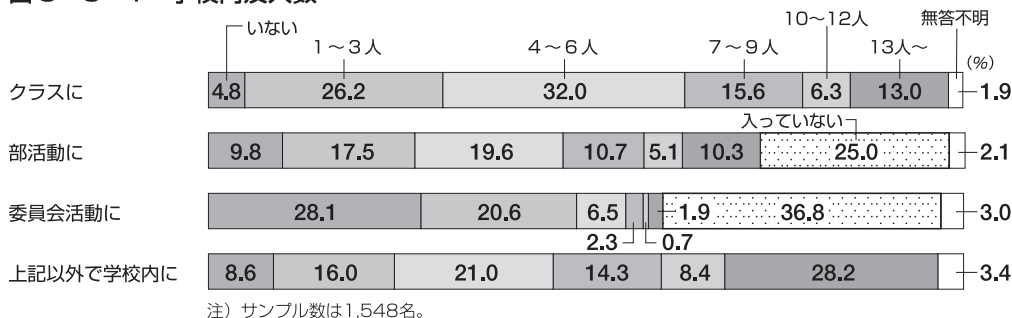
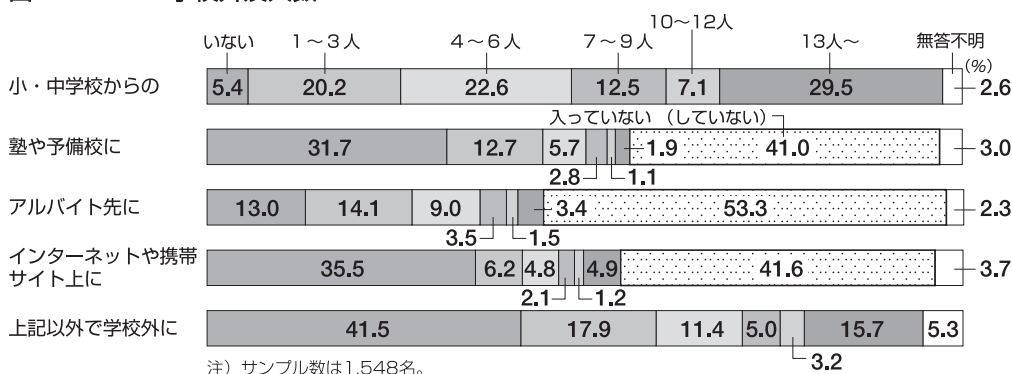


図 3-3-2 学校外友人数



都立高校生の友だちづきあいについてみる。まず学校内に親しい友だちがどれくらいいるかについての結果を示したのが図3-3-1である。学校内の友だちづきあいに関しては、委員会活動よりもクラスや部活動でのつきあいが多いことがわかる。「クラスに」「部活動に」とともに「13人以上（13人～）」が1割以上いる。一方で、クラス、部活動、委員会活動以外で校内に（「上記以外で学校内に」）親しい友だちが「13人以上」いると答えた生徒も28.2%となっている。これはクラス替え前の友人や、友人の友人などで広範な交友関係を築いていることが考えられる。

次に、学校外の友だちづきあいについてみ

てみる（図3-3-2）。「小・中学校からの」友人数に関しては、「13人以上」いると答えた生徒が29.5%とともっとも多くなっている。一方、「塾や予備校に」「アルバイト先に」の友人数をみると、「入っていない（していない）」や「いない」が多く、それ以外でもっとも多く答えた項目はともに「1～3人」で、それぞれ12.7%、14.1%となっている。小・中学校時代の友人数と比較すると、親しい友人がいる比率も、いる場合の友人数も少ないことがわかる。学校外の友だちづきあいとはいっても、これまでの学校生活で育んだ交友関係のなかでのつきあいが大半を占めているのが現実のようである。

### 3.4

## 塾や予備校

現在の通塾率は2割。7割は中学時代の通塾経験がある

**Q** あなたは、現在塾や予備校に通っていますか。

図3-4-1 通塾状況（全体、高校グループ別）

	現在通っている	現在通っていないが、通いたい	現在通っておらず、通いたくない	無答不明	(%)
全体 (1,548)	21.9	22.0	49.0	7.2	
Aグループ (606)	38.8	30.5	27.6	3.1	
Bグループ (308)	17.9	24.0	52.3	5.8	
Cグループ (634)	7.7	12.8	67.8	11.7	

注) ( ) 内はサンプル数。

**Q** あなたは小・中学生のとき、塾に通っていましたか。

表3-4-1 小・中学校時代の通塾経験（全体、高校グループ別）

	全体 (1,548)	Aグループ (606)	Bグループ (308)	Cグループ (634)	(%)
小学生のとき					
通っていた	27.6	31.4	28.2	23.8	
通っていないかった	68.9	67.5	68.8	70.3	
無答不明	3.4	1.2	2.9	5.8	
中学生のとき					
通っていた	74.4	82.7	> 77.6	≫ 65.0	
通っていないかった	24.8	17.2	21.8	≪ 33.6	
無答不明	0.8	0.2	0.6	1.4	

注1) ≪≫は10ポイント以上、<>は5ポイント以上差があることを示す。

注2) ( ) 内はサンプル数。

都立高校生の通塾状況がどのようになっているかをたずねた（図3-4-1）。全体では「現在通っている」生徒が21.9%である。図表は省略するが、「私立高校生調査」では、都立高校生の倍以上にあたる48.3%の生徒が「現在通っている」と回答していた。都立高校生と私立高校生の通塾状況は、異なる傾向にあることがわかる。

さらに図3-4-1で高校グループ別に通塾率を比較すると、「現在通っている」比率はAグループで38.8%、Bグループで17.9%、Cグループで7.7%と、グループ間で大きな違いがみられた。また、「現在通っておらず、通いたくない」の比率は、Aグループ27.6%、

Bグループ52.3%、Cグループ67.8%であった。大学進学率が高い高校の生徒ほど、塾に対して積極的な姿勢をとる傾向があるということがわかる。

小・中学校時代の通塾経験については（表3-4-1）、小学校で通っていた生徒は全体の27.6%だが、中学校では74.4%と、46.8ポイント増加している。高校グループ別にみると、小学校時代の通塾経験にはあまり差がみられない。中学校時代に通塾経験があると回答した生徒は、Aグループ82.7%>Bグループ77.6%>Cグループ65.0%であり、大学進学率の高い高校の生徒ほど、中学校時代の通塾経験が多くなっている。

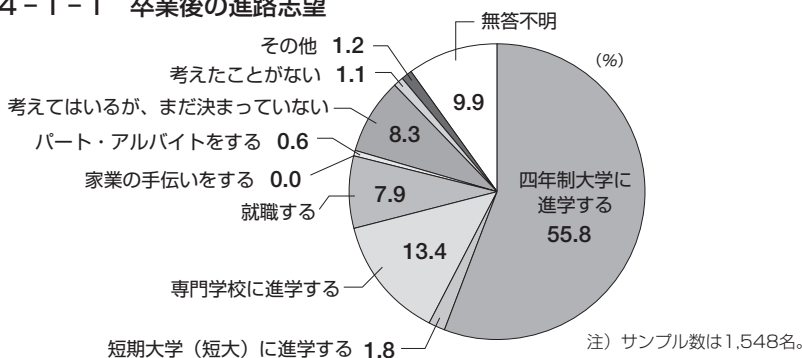
## 第4節 進路観・将来観

### 4.1 進路観・将来観

四年制大学志望が5割強、専門学校志望が1割強

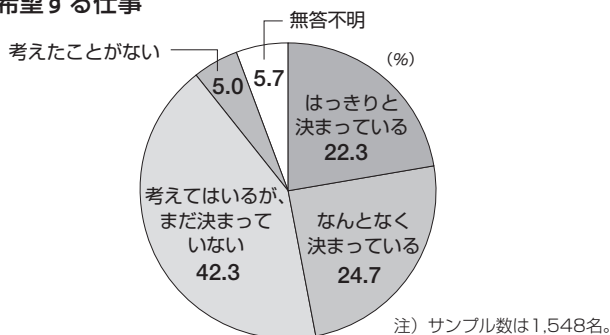
**Q** あなたは、高校卒業後どのような進路を考えていますか。

図4-1-1 卒業後の進路志望



**Q** あなたは、将来やりたい仕事がどれくらい具体的に決まっていますか。

図4-1-2 将来の希望する仕事



都立高校生が2年生の段階で、卒業後の進路をどのように描いているのかについてたずねた。図4-1-1によると、もっとも多かったのが「四年制大学に進学する」の55.8%で、つづいて「専門学校に進学する」が13.4%、「考えてはいるが、まだ決まっていない」が8.3%、「就職する」が7.9%であった。四年制大学、専門学校、短大をあわせた高等教育機関への進学を希望するものは、全体の71.0%であった。

次に、将来の希望する仕事がどれくらいはっきり決まっているかについてたずねたのが図4-1-2である。もっとも多かったのが「考えてはいるが、まだ決まっていない」の42.3%であった。ついで「なんとなく決まっている」が24.7%、「はっきりと決まっている」が22.3%であった。将来への展望を明確にもっている生徒ばかりではなかったが、全体の89.3%の生徒が将来やりたい仕事について考えていることがわかった。